

このpdfは野間秀樹編著『韓国語教育論講座』第4巻(くろしお出版・2008年)の内容見本です。ISBN 978-4-87424-410-4。無断引用はご遠慮ください。『韓国語教育論講座』の詳細は次をごらんください。http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/edu_top1.html

歴史学からの接近(月脚達彦)

歴史学からの接近

月脚 達彦(つきあし・たつひこ)



1. はじめに

言葉を学ぶためには、歴史的背景を知らなければならないという話をよく聞く。しかし、朝鮮史研究と朝鮮語教育を有機的に関連させることはそう容易なことではない。以下では、朝鮮語を学ぶ大学生に、朝鮮史研究入門の一環として話してきた、朝鮮近代史研究の歴史と現状について記すことで、筆者に与えられた課題に代えたい。あくまで筆者の関心に引き付けた整理なので、当然取り上げるべき論考や論点も多いが、それについては、別の機会に論じてみたいと思う。

2. 戦後・解放後の朝鮮史研究の再出発と内発的発展論

2.1. 朝鮮史研究の再出発

周知のとおり、歴史学とりわけ「国史」と呼ばれるものは、「国語」と同様に国民国家の成立と密接な関係をもっている。日本でそれが確立する時期は日清戦争(1894-1895)を前後する時期であり、朝鮮でも甲午改革(갑오개혁 1894-1896)および1897年の大韓帝国の成立の頃から、「国史」の模索が始められた。しかし、1904年の日露戦争を経て大韓帝国が日本に保護国化(1905)、さらには併合(1910)されることによって、朝鮮における国民国家創出は挫折させられることになる。保護国の時代に、朴殷植(박은식 1859-1925)や申采浩(신채호 1880-1936)による歴史研究が登場し、後に民族史学として発展していくのであるが、アカデミズムの世界における朝鮮史研究は、日本人研究者によって主導された。

当然のことながら、日本の敗戦、朝鮮の解放は、日本人研究者中心の朝鮮史研究に対する根本的な批判の契機となった。戦後日本における初めての本格的な朝鮮通史¹⁾を著した旗田巍(1908-1994)は、その「序」で次のように述べている：

いまや朝鮮史の研究は新たな出発の時期に臨んでいる。従来の成果を汲み取ると同時に、それを乗り越え、新しい朝鮮史を開拓せねばならない。朝鮮の人間の歩んで来た朝鮮人の歴史を研究せねばならない。いま苦難の鉄火にまきこま

1) 旗田巍(1951)

れている朝鮮人の苦悩を自己の苦悩とすることが、朝鮮史研究の起点であると思う。

朝鮮史の通史なのであるから、「朝鮮の人間の歩んできた朝鮮人の歴史」というのは当たり前のようであるが、ことさらそう述べなければならなかったところから、戦後日本の朝鮮史研究は、日本人にとってすぐれて自己批判的なものとして始まったことが理解されよう。近代史の分野では、山辺健太郎²⁾(1905-1977)がいち早く、新史料を発掘しながら、「朝鮮史では、まず日本の朝鮮侵略の事実をあきらかにすることが必要だと思う」とし、「日本軍国主義」「日本帝国主義」の朝鮮侵略を徹底的に批判する研究を行なった。²⁾

2.2. 内在的発展論

一方、解放後の朝鮮における研究が日本の朝鮮史研究者に与えた影響も大きかった。北朝鮮の研究は、1960年代に入るところから、いわゆる「資本主義萌芽論」を主張し始めた。また、韓国・北朝鮮双方で「実学」³⁾に対する関心が高まり、特に北朝鮮では、さらにこれを受け継いだ19世紀後半の開化派に大きく着目することになる。このような戦後・解放後の研究の展開の中で、戦前・解放前の日本人研究者を中心とした研究、いわゆる「植民史学」の問題点は、「他律性史観」と「朝鮮社会停滞論」であると整理された。単純化すると、朝鮮は半島という地理的要因によって常に大陸の動向に左右され(他律性)、また西欧や日本のような「封建制」を欠如している、つまり日本の例でいえば藤原朝の段階に止まっている(停滞性)というのである。これに対して戦後・解放後の朝鮮史研究は、朝鮮史を「他律的」にではなく「内在的」に、「停滞的」ではなく「発展的」に描くことになり、それは内在的発展論と呼ばれるようになった。特に、朝鮮王朝後期に資本主義が芽生え、それとあいまって近代志向的な思想が形成されたことが強調された。

そのような事情は、日本の朝鮮史研究会(1959年創立)が、1974年に刊行し

2) 山辺健太郎(1966b), 「あとがき」。

3) 実学とは17-18世紀に朱子学の内部から発生した思想潮流で、通説的には農業などの制度改革を唱えた経世致用(けいせいちよう)学派、中国の清から進んだ技術を受け入れるべきだと主張した利用厚生(りようこうせい)学派、金石文字学や考証学に重きを置いた実事求是(じつじきゅうぜ)学派に分けられる。

た通史の「序章」によくあらわれている：⁴⁾

朝鮮は停滞・落後していたのかどうか。これはあらためて問い直されるべき問題である。近來の研究によると、近代列強と接触する以前の朝鮮社会の胎内には、古い社会の枠を突き破るべき資本主義的要素がうまれていた。農業・工業のなかで、さらに思想の面で、近代を志向するものが胎動していた。朝鮮の民衆は眠っていたのではなく、旧社会をのりこえ新しい社会をつくるための努力をしていた。民衆生活のなかには、未成熟とはいえ資本主義をめざす変化がおこっていた。しかし、その正常な発展は阻害された。日本を先頭とする列強の侵略が近代化の芽をつみとり、古い社会経済体制を温存・再編したからである、ということが、近年の研究でわかってきた。

この本は、日本人朝鮮史研究者による内在的発展論に基づいた通史として画期的なものである。そして、ここでいう近來の研究とは、北朝鮮・韓国での研究がその主要な部分を占めている。特に北朝鮮における研究は、朝鮮史においてもマルクス主義の歴史発展の合法則性が貫徹していることを解明しようとした。近代史で最も大きく注目されたのが、1884年の甲申政変と、その指導者である金玉均キムオクキュン（김옥균 1851-1894）である。사회 과학원 력사연구소 편（社会科学院歴史研究所編 1964）は、甲申政変の性格を「ブルジョア的性格」および「愛国主義的反侵略的性格」と規定し、これはその後の北朝鮮における甲申政変評価に基本的に引き継がれることになった。⁵⁾ もっとも、甲申政変は金玉均ら開化派が、日本と結んで起こしたクーデターである。日本による侵略の歴史として朝鮮近代史をみる場合、甲申政変は愛国的で反侵略的であったと安易に評価できないことになる。したがって、山辺健太郎は甲申政変を「日清両国とむすぶ政府内の派閥対立」から派生した「支配層内部の政権奪取戦」として、北朝鮮における甲申政変こうしん（갑신정변）評価に反論を提示したが、사회 과학원 력사연구소 편（社会科学研究院歴史研究所編 1964:429-505）は、これを「帝国主義御用学者」の見解と変わらないものとして一蹴した。その後、日本帝国主義研究においても、朝鮮の内在的な「ブルジョア的」発展の視角に着目しながら、日本帝国主義の侵略の

4) 朝鮮史研究会編(1974), 「序章」(旗田巍執筆)。

5) 北朝鮮における金玉均評価の背景については、梶村秀樹(かじむらひでき 1966)が参考になる。

歴史を明らかにする必要性が唱えられるようになった。

内在的発展論とは、朝鮮史において民族による自生的近代を見出すことを主眼とする方法と見てよい。そして、日本の植民地支配が朝鮮民族に与えた害悪は、単に人的・物的被害のみならず、その内在的発展を阻止・歪曲したところにあるのであり、現代の朝鮮半島の様々な矛盾は、何よりもそこから発生したものだということになる。したがって、近代日本の自己批判という意味でも、内在的発展論は戦後朝鮮史研究の総決算だといえるだろう。具体的な研究テーマとして、社会経済史・思想史における発展の様相、内在的発展を歪曲するものとしての日本の侵略と収奪、それに対抗する朝鮮民族の解放闘争などの研究が進められた。

内在的発展の朝鮮史像を、思想史の分野から極めて明快に提示したのが姜在彦^{カンジェオン} (강재언) の一連の研究である。その集大成といえる姜在彦(1980)は、「はしがき」で次のように述べている：

要するに本書のモチーフは、朝鮮における自生的近代化の不在が他律的近代化＝植民地化を必然としたとする他律性史観にたいして、思想史的側面から反証したことに尽きるといえよう。そこで重要なポイントは、多くの研究書または教科書にまで定着しているように、近代朝鮮における開化派をその思想的内実と系譜を検討することもなく、やみくもに「親日派」として烙印してきた通説にたいして、その根底からの問い直しがこの作業の端緒であり、そこから遠く開化思想の歴史的起源にさかのぼり、さらにくだってその思想の運動との結合と展開過程に及ぶというプロセスをたどっている。

北朝鮮の甲申政変・金玉均評価を、全面的にはないものの取り入れた姜在彦は、17-18世紀の実学に起源を持つ「自由民権思想」(「ブルジョア民主主義思想」)としての開化思想の形成、その後の独立協会運動、愛国啓蒙運動、三・一運動へいたる近代的民族主義の発展という体系を示したのである。

一方、内在的発展論は、マルクス主義の歴史の発展法則に沿って、社会主義的変革をめざしながら朝鮮史を発展的に捉えようとするものであるが、韓国でも日本や北朝鮮とは異なる背景をもって朝鮮近代史を発展的に描く研究がなされた。その中でも、独立協会(1896-1898)および万民共同会(1898)の運動を、「自主独立思想」・「自主民権思想」・「自強改革思想」に基づくものとして高く評価した慎鏞廈^{シンヨンハ} (신용하 1976) は、今日の韓国の朝鮮近代史研究でも影響力をもっている。